仙台圏サッカーユース年代の競技力向上に関する調査研究
－ジュニア層競技者を対象とした育成環境の改善に着目して－

松山　博明　　関岡　康雄　　勝田　隆

キーワード：ジュニア層，一貫指導システム

A research on skill development of youth soccer players in Sendai area
—Improvement of nurturing environment for junior players—

Hiroaki Matsuyama　　Yasuo Sekioka　　Takashi Katuta

Abstract

There seems to be existing an urgent desire to prepare international caliber soccer players from Sendai area. For this purpose, it is felt necessary to provide an adequate developmental environment and coaching programs. The aim of this research was to obtain basic data for improving such nurturing environment. The research consisted of three parts; a survey on the status quo of the environment in Sendai area, a comparative survey between the Sendai area and Shizuoka area, and an analysis of factors available for improvement of the environment.

Materials used were documents issued by Japan Football Association and Japan Amateur Sports Association, results of questionnaire to which responded by 21 clubs in Shizuoka area and 21 clubs in Sendai area, and a comparative case analysis on coaching procedures based on growth and development of players. The results could be summarized as follows:

1. As to performances in junior national championships, number of certified sports instructors, number of certified referees, and number of national caliber players, Shizuoka prefecture was ranked on the top most; however, Miyagi prefecture was 30th, 15th, 10th , and 28th , respectively.
2. When compared with composite and employment conditions of coaching staff, organized pattern and activity of players, coaching policy, etc., Shizuoka area revealed higher level in every aspect than Sendai area.
3. Adoptions of suitable drills based on players' growth and development, which were suggested as references for coaches and instructors by Japan Football Association, including a small side game, possession drill, one to one, two to two, shooting practice, were more adequately introduced in the Shizuoka area than in Sendai area.
4. Suggestions derived from this research were: more personnel to be employed, especially certified coach for goal keeper; more expert scouting personnel to find talented players; clubs to be organized with junior youth and youth team, priority of coaching to nurture international caliber players; drilling with game images; and encouraging positive attitudes without fear of failures.

Keyword : sjunior youth soccer, skill improvement, nurturing environment coaching, club management

Ⅰ．目的

本研究は，仙台圏のジュニアおよびユースレベルの強化環境が，その指導内容も含めて，果たして日本サッカー協会が標榜する「世界に目を向けた一貫指導システム」の線上にあるのかどうか，ということを検証することである．そして，その根底には，「仙台圏から将来，国際舞台で活躍する競技者を多数輩出したい」という個人的な願いも強く存在している．そのためには，今後の仙台圏サッカーの強化環境や指導についてのあり方をコーチング上の観点にたって研究することが重要であると思われる．特に，発掘・育成期にあたるジュニア層の育成環境と指導について，慎重な検討と将来的な具体的ビジョンを提示し，計画的に実行しなければならないであろう．

本研究は，そのために必要な基礎的資料を得ることであり，具体的には，仙台圏におけるジュニアおよびユース層競技者の育成環境の実態を明らかにし，貢献可能とするための知見を得ることを目的として検討をすすめたものである．

Ⅱ．研究1

1．目的と方法

本研究では，宮城県のジュニアおよびユースレベルの競技者育成環境の現状を把握するため，4 つの項目の調査を行い，都道府県別に集計した．

ジュニア層の全国大会における成績，公認スポーツ指導資格者取得数，公認審判員資格取得数，日本代表競技者輩出数を調査した．

調査は，日本サッカー協会および日本体育協会発行の資料にもとずいて行った．

2．結果と考察

育成環境の現状を把握するための 4 つの項目を都道府県別に集計した結果，静岡県は，全てにおいて，全国トップレベルであることが明らかになった．一方，宮城県も同様に同じ調査を行った結果，「主要な全国大会の成績 30 位，公認スポーツ指導者取得数 15 位，公認審判員資格取得数 10 位，日本代表競技者輩出数 28 位」であった．

したがって，静岡県は，人的要因が充実していることが理解できた．今後，宮城県の競技力向上を推進するためには，静岡県の例にならうなど，育成環境の整備が必要であると考えられる．(表 1,2,3,4)

表１　ジュニア層全国大会成績換算表

	宮城県	静岡県
全国少年サッカー大会	0	13
全国中学校サッカー大会	0	24
高円宮クラブユースサッカー大会	0	17
全日本ジュニアユースサッカー大会	0	13
全国高校サッカー総合体育大会	1	19
全国高校サッカー選手権大会	0	8
高円宮クラブユースサッカー選手権大会	0	23
国民体育大会(少年の部)	0	23
合計	1	140

＊数字は換算による得点　(2000.7.1 現在)

表２　日本体育協会公認スポーツ指導者資格取得数

単位：人数

	S級コーチ	A級コーチ	B級コーチ	C級コーチ	合　計
静岡県	13	16	19	34	82
宮城県	3	1	8	10	22

(2000.7.1 現在)

表３　公認審判員資格取得数　単位：人数

	1級	2級	3級	4級	合　計
静岡県	2	112	1,510	8,935	10.559
宮城県	2	77	209	2,143	2,431

(1999.12.29 現在)

表４　日本代表競技者輩出数　単位：人数

	日本代表	23 歳以下	20 歳以下	合　計
静岡県	33	37	47	117
宮城県	0	1	2	3

(2000.7.1 現在)

Ⅲ．研究2

1．目的と方法

ジュニア層競技者の育成環境に関する調査．

本研究の目的は，宮城県のサッカージュニア層競技者の育成環境改善に関する課題を明らかにすることである．調査した際，静岡県は，28 クラブチーム中 21 クラブチームの回答があった．しかし，宮城県では，23 クラブチ

ーム中15クラブチームと回答が少なかったために，福島4クラブチームと山形2クラブチームを加えて行った．

したがって，静岡県を静岡圏エリアとし，宮城県，福島県，山形県を仙台圏エリアとして，双方のチームを同数に設定し調査を行うこととした．仙台圏および静岡圏のサッカークラブ各 21 チームを対象とした育成環境に関する調査を実施した．

調査項目は，コーチングスタッフの待遇や構成，活動状況，活動に関する経費，競技者の組織形態，指導方針，トレーニング内容，指導者の活動内容などの項目に絞って行った．

2．結果と考察

結果から，「コーチングスタッフの待遇や構成(ゴールキーパーを指導する指導者，スカウト)，競技者の組織形態(ユースレベルの活動状況)，指導方針(将来，国際的な競技者を育てることを最優先した指導，ゴールデンエイジにあった指導)」などのそれぞれの項目において静岡圏がもっとも高いレベルにあることが明らかになった．この中で「特にゴールデンエイジにあった指導」について，発育発達と深い関係があり，指導する上で特に大切であると考えられるので「発育発達に配慮した指導」として広く捉え，研究3としてさらに深く考察を行うこととした．

Ⅳ．研究3

1．目的と方法

本研究の成果を強化現場により具体的に還元するため，研究2の結果から仙台圏および静岡圏それぞれにおける指導上の大きな相違点を取り出し，その因子について事例的に検討を加えた．具体的には，研究2の調査において「発育発達に配慮した指導を行っているか」という質問に対して，静岡のチームの方が仙台圏より明らかに多く「行っている」と回答しており，この点を現場の指導上重要であると着目し研究3として調査した．

調査は、仙台圏および静岡圏のチームが「発育発達に配慮したトレーニング」をどの程度行っているかを具体的に行うことであった．具体的には，日本サッカー協会から提示されている年代に応じたトレーニングおよびトレーニング参考モデルの中のトレーニング項目(スモールサイド・ゲーム，ポゼッション・トレーニング，1対1，2対2，シュート・トレーニング<以下，標準項目とする>)を基準として仙台圏および静岡圏のチームが，この標準項目に類似したトレーニングをどの程度実施しているかを調査することであった．

調査の対象チームとしては，両エリアのトレーニング内容上の違いを最も適切に表していると思われたチーム一つをモデルとして取上げ，事例的に調査した．なお，調査にあたって，それぞれの指導者から約1年間に渡る日誌の中で記述されていた標準項目と同じような項目を一つずつ確認して比較調査を行った．(表5-1,2)

表5-1・仙台圏チームのプロフィール
千葉県市原市を中心に活動するJリーグチームの下部組織のチームであり，このJリーグチームが全国約5地域でスクールを開校しているひとつにあたる． 創部：1991年9月開校　活動拠点：仙台市　部員数：25名　拠点：宮城県仙台市　スタッフ数：1名（監督1名）

表5-2・静岡圏チームのプロフィール
静岡県清水市を本拠地に活躍するJリーグチームの下部組織のチームである．創部：1991年2月開校　拠点：静岡県清水市　部員数：25名　スタッフ数：2名（監督1名，キーパーコーチ1名）

2．結果と考察

日本サッカー協会の示す標準項目と仙台圏および静岡圏のトレーニング項目との比較調査の結果，静岡圏の方が，M−T−Mメソッド(ゲーム・トレーニング・ゲーム)の考えを念頭においてトレーニングを行っていた．また，スモールサイド・ゲーム(4対4と7対7)，ポゼッション・トレーニング(4対2)，1対1の攻防は(1対1からシュート)，シュート・トレーニング(ポストシュートとパターンシュート)を重点的に行っていた．そして，トレーニングを確認する意味でも個々の発育発達に配慮した評価シートを適宜導入していた．

Ⅴ．要約

仙台圏の指導者が改善あるいは、さらなる向上にむけての知見は以下の通りであった．

1.スポーツ指導者資格や審判員資格取得数などの人的要因の充実を図ること．

2.ゴールキーパーを指導する有資格の指導者数を増加させること．

3.ジュニア層における専任スカウトを設けるなど競技者の発掘に尽力すること．

4.クラブにジュニアユースとユースの2チームを作り，一貫した環境を整えること．

5.将来，国際的な競技者を育てることを最優先した指導の意識を持つこと．

6.1回のトレーニングの中で，M−T−Mメソッドの考え

を念頭におきながら行うこと.

7.日本サッカー協会の示す標準項目の中で，特にスモールサイド･ゲーム(4 対 4 と 7 対 7)，ポゼッション・トレーニング(4 対 2)，1 対 1 の攻防は(1 対 1 からシュート)，シュート・トレーニング(ポストシュートとパターンシュート)を重点的に行うこと.

8.個々の発育発達に配慮した評価シートなどの効果的活用についても検討すること.

ジュニア層競技者を対象とした一貫指導システムの確立，さらには指導者育成の充実を含め年代に応じたコーチングシステムの構築に向けたさらなる取り組みが仙台圏サッカー競技力向上に求められる.

VI.今後の研究課題と展望

本研究は，仙台圏のジュニアおよびユース層の育成環境における現状や課題を，日本におけるサッカー先進である静岡圏と比較することで明らかにしようと試みた.
その結果，さまざまな将来に資するための課題が明らかになったが，その一方で，研究の方法も含めてあらたな問題点や，さらに検討を加えるべき課題も見つけることができた.

本研究の課題や今後の展望については，以下のとおりである.

1．本研究では，日本体育協会公認スポーツ指導者資格数，あるいは公認審判員資格数など，その人数だけを取り上げて考察を行ったが，今後は，資格を有している指導者および審判が，実際にどのように現場で活躍しているのか，その活動状況などを具体的に調査していく必要があると考えている.

資格を有しているだけで，実際の指導に還元できなければ，競技力向上につながらないと思うからである.

2．分析 2 の調査結果から，将来，国際的な競技者を育てることを最優先した指導において，静岡圏のチームは，3 チームに 1 チームが意識した指導を行っていると回答していた．このことは，長期的展望に立った強化を考える上で極めて重要かつ興味深い視点であると考えられる.

本研究は，仙台圏から国際的な競技者を輩出したいという大きな研究課題にしていた．しかし，その過程において，この課題を取り上げて研究することが出来なかったことはこれからの大きな課題にしていきたい.

したがって，今後，世界に通じるような指導をしていると回答した静岡圏が，実際どのようなことを行っているのかを具体的に明らかにしなければならない.

そして，それに対して仙台圏の実状と比較することも必要である．今後の重要な研究課題と位置づけたい.

3．発育発達に配慮したトレーニングについては，より個別的に展開する工夫が必要であり，個々に合った課題に変化を加えた指導を意識させることがより重要となると考えられる．しかし，一般的には，実際の指導の現場においては，一人の指導者が多数の競技者を指導するチームが多く，一人一人の競技者に的確な発育発達に合わせた指導が困難な現状があることは経験的に明らかである.

そこで，このような現状を打開するための有効な方法についての研究を行いたい.

具体的には，指導者の人数的な面などが原因で個別的な指導が展開しにくいと思われるチームの中から成功例を取り上げたり，また，その有効性に検討を加えたい.
例えば，目標を失ってしまった競技者に対して，指導者として新しい目標設定を行い，人数不足を補う方法の有効性を探ってみたり，指導者を勉強したいボランティアの学生に働きかけて協力を仰ぐ方法を模索していきたい.
さらにクラブ運営あるいは指導方法などで新たな方策を考え出し実験的に検討を加えるなど，実際の指導に具体的に生かされるような研究を実践的に行いたい.

最後に，今回の研究を進めていく中で，仙台圏および静岡圏の比較の中から以下のような指導上の違いも見つけることができた． 主観的な分析ではあるが，見逃せない観点と考え付け加える.

1）静岡圏の指導者の多くが，仙台圏と比べて，競技者に常にゲームと同じ気持ちを意識させ，ゲームをイメージさせるようなトレーニングを組み立てることを意識しているようであった.

トレーニングの中でゲームを意識して行うことは，技術力向上において極めて重要なことである.

2）静岡圏の指導者は競技者にトレーニングの中で，ミスを恐れず積極的なプレーを促すような言葉がけを行っていた.

このようなことから，指導者は，競技者にミスを恐れず積極的にチャレンジすることができるトレーニング環境をつくる必要がある.

これらの研究によって得られた結果も非常に興味深い内容であり，さらなる研究を深めていく必要があると考えている.

また，研究で得ることができた内容を今後の現場で試みて，実証していきたいと考えている.

Ⅶ. 文献・資料

1) アーセン・ベンゲル(1997)勝利のエスプリ.啓文堂・大熊整美堂.pp83－96.
2) 浅見俊雄(1998)スポーツと健康.文部省体育局.pp7－10.
3) 浅見俊雄(1998)サッカーのルールと審判法.(株)大修館書店. pp4－5.
4) 小野剛(1998)クリエイティブサッカー・コーチング.(株)大修館書店. pp5.
5) 小野剛(1998)クリエイティブサッカー・コーチング.(株)大修館書店貢. pp122.
6) 小野剛(1998)クリエイティブサッカー・コーチング.(株)大修館書店.pp175.
7) 勝田隆(2000)強豪国の強さを探る―世界的スポーツイベトにおける強豪国の強化背景に関わる要因分析.pp1.
8) 勝田隆(2000)私的テクニカル論.pp1－10.
9) 釜本邦茂(1994)釜本邦茂の熱血サッカー読本.(株)騎虎書房.pp29.
10) 財団法人日本体育協会(1993)A級コーチ教本.広研印刷.pp166－172.
11) 財団法人日本体育協会(1984)提言 スポーツ 21'への飛躍(案)
ホクエツ印刷(株).pp17－55.
12) 作田啓一.恥の文化再考.筑摩書房
13) 佐伯聰夫(1999)平成 11 年度コーチ会議報告書.一貫指導システム構築のためのモデル事業中間報告.pp39－40.
14) スチュワート・バクスター(1996)勝つための組織力.(株)講談社.pp184－185.
15) サッカー競技規則(1998)
LAW OF THE GAME.
(財)日本サッカー協会.pp104.
16) 沢田稔行(2000)埼玉新聞 部活動は今.pp5 面.
17) ジーコ(1998)ジーコの'個'を活かして勝つ.(株)ごま書房.pp83－84.
18) ジーコ(1993)ジーコのリーダー論.(株)ごま書房.pp150.
19) 関岡康雄(1999)陸上競技を科学する.道和書院.pp180－195.
20) ＪＦＡニュース増刊号.強化指導指針 2000 年版ポスト 2002.
(財)日本サッカー協会機関紙.pp5.
21) ＪＦＡニュース増刊号.強化指導指針 2000 年版ポスト 2002.
(財)日本サッカー協会機関紙.pp32.
22) ＪＦＡニュース増刊号.強化指導指針 2000 年版ポスト 2002.
(財)日本サッカー協会機関紙.pp36.
23) ＪＦＡニュース増刊号.強化指導指針 2000 年版ポスト 2002.
(財)日本サッカー協会機関紙.pp78.
24) 田島幸三(1997)世界に勝つ練習と環境づくり.トレーニングジャーナル
(ブックハウス HD) .pp88.
25) 田島幸三(1997)世界に勝つ練習と環境づくり.トレーニングジャーナル
(ブックハウス HD) .pp89.
26) 佃哲章(1999)平成 11 年度コーチ会議報告書.一貫指導システム構築のためのモデル事業中間報告.サッカー部門.
27) 東根明人(1997)日本型球技トレーニングへの提言・4・ジュニア育成環境を考える.トレーニングジャーナル(ブックハウス HD).pp62－65.
28) 日本ラグビーフットボール協会強化推進本部(1998)楕円進化論.(株)ベースボールマガジン社.pp81.pp44－46.
29) 日本ラグビーフットボール協会強化推進本部(1998)楕円進化論.
(株)ベースボールマガジン社.pp87.
30) ベルンハルト・ブルックマン(1998)ゴールキーパーのトレーニング.(株)大修館書店.pp1.
31) 村田光範(1998)ジュニア期の成長・発達とトレーニング.
トレーニングサイエンス(トレーニング科学研究会) .pp63－68.
32) 森田淳悟(2000)スポーツニッポン 日立バレー廃部.pp5 面.
34) 文部省(1998)一貫指導システム構築のためのモデル事業実施要項. pp1.
35) 文部省(2000)スポーツ振興基本計画.pp15.
36) 文部省(1998)財団法人日本体育協会公認スポーツ指導者制度.pp1－2.